

木曾路名所図会 秋里籬島著 文化二年(一八〇五)

中山道琵琶嶺 「細久手より壱里余りにあり 道至つて険しく岩石多く 登り下り十町許りなり 坂の上より丑寅の方に木曾の御岳見ゆる 北には加賀の白山飛驒の山の間より見ゆる 白山は大山なるが故に麓まで雪あり 日本三番の高山なり 西に伊吹山見ゆる(琵琶峠頂上文学碑) 母衣岩は琵琶峠の下にあり 烏帽子岩は右の傍にあり 何れも其の形をもつて名とせり 大湫より大井まで三里半(以下略)」

岐蘇路記 貝原益軒(本草学者・儒学者)著 貞享三年(一六八五)

中山道十三峠 「中津川より大井へ二里半六町 中津川の町民家二百余あり 根津の甚平の石塔あり 大井より大久手へ三里半 大井の民家百二十軒程あり 中野村より左へ尾張名護屋へ行く道あり 尤も直ぐ道にて谷へ下りゆく 大久手へは右へ回り北の方へ行く 此の間に西行坂とて坂あり 西行の墓あり 大久手より細久手へ一里半」と記す

打出浜記(丙寅紀行)^{へいゐん} 烏丸光荣(内大臣)著 延享三年(一七四六)

中山道琵琶坂 「大久手という所より琵琶坂というを越ゆ 今日道すべて山の尾の上なり 峠より彼方こなたを見渡すに 越の白山峯ごしに山の腰わずかに見ゆ 見るがうちに雲へだたりぬ 『み越路の白嶺何処と白雪を振りさけ見れば雲に消えつつ 光荣』 伊吹の遙かなれどさだかに見ゆ」(琵琶峠頂上文学碑)

癸丑遊曆日録

吉田松陰（長州藩志士）著 嘉永六年（一八五二）

中山道大久手宿

嘉永六年正月二十六日萩出發 中山道々中で江戸へ 三月十二日美濃

国へ入る 「三月十五日太田を發し舟にて木曾川を横切り伏見、御嵩、細久手を過ぎて大久手に宿す。行程八里 宿に着きし後大雷雨あり 乍ちにして止む。駅にて村瀬氏（五代半左衛門令寛）を訪う。村瀬氏曰わく『御嵩の近村中村は可兒郡に属し 可兒才藏此の地に生まる』と。村瀬氏の子有芳（後年の六代半左衛門令徳）余に字を求む。乃ち書して之を与う。有芳余に贈るに自画二葉を以てす。駅にて平戸の人に遇い 一書を作りて葉山鎧軒翁に贈る（中略） 十六日雨已にして止む。終日陰影。大久手を發して大井に至る。此の間道の左に僧西行の墓あり。中津川に至りて午餉す。江戸の人田辺定輔に逢う。定輔は村瀬誨輔の二男なり。相併びて行く。落合を経て馬籠に至る。この間を美濃・信濃の界となす。妻籠を経て三戸野に宿す。此の間又木曾川の傍に出づ」と記している。

新撰美濃志

岡田文園（尾張藩士）著 天保元（一八三〇）～二八六〇

中山道琵琶峠

「琵琶峠は細久手に到る大道の坂をいう 岩石多く道険しく 登り下り十町計りもあり 坂の上より巳寅の方に木曾の御岳見え 北には加賀の白山飛驒山の間より見ゆ 白山は大山なる故麓まで雪あり 西に伊吹山も見えて好景なり（琵琶峠頂上文学碑） 母衣岩は琵琶坂の下の路傍にあり たて横二丈計の大石なり 烏帽子岩は母衣岩の西に並らべり 大きき母衣岩ほどあり 遠近の人よく知れり」

中山道大湫宿

「中山道の宿駅にて 京の方細久手宿より一里半余 江戸の方大井宿より三里半の馬継ぎ也 尾州御領名古屋まで十六里あり 十三嶺は宿の東大井宿との間にあり（宗昌寺駐車場入口文学碑） 中山道筋登り下り多き故しか名づく されども坂道安らかにて嶮岨ならず 小牧山は駅の南にあり さのみ高からねど諸山に秀でて見るに足れり 野田嶺は駅の北にあり 千村氏毎年氷餅を製して献上する地なり」

濃州徇行記

樋口好古(尾張藩士)著 寛政年間(一七八九～一八〇〇)

宝曆六年(一七五六)尾張藩書物奉行松平君川著の「濃陽志略」を参考に美濃国内の尾張藩領の郡村全部について詳しく記述した書。

土岐郡大久手村

一、高百九石八斗二升 田畑九町一反二畝(田七町六反一畝 畠一町五反一畝) 右の内五十四石

九斗一升山村甚兵衛采地 五十四石九斗一升千村平右衛門采地

一、公儀御定馬二十五匹 人足二十五人

一、元禄七戌年公儀証文面 助郷高一万九十七石 内尾州領二百三十一石 他領九千八百六

十六石 ○尾州領高百八十一石半原村○松平能登守領高千二百三十六石神籠村○笠松支

配百四十石・松平能登守領百六十石・遠山民部領五十三石高合三百五十三石猿子村○笠

松支配百七十一石・遠山民部領五十三石高合二百二十四石須ノ宮村○同支配五百六十一

石・同領七十石高合六百三十一石小里村○笠松支配高二百石萩原村○馬場右膳領高千石

釜戸村○尾州領五十石・松平能登守領七百三十三石高合七百八十三石一日市場村○笠松

支配高五百七十九石寺河戸村○同支配高五百四十六石小田村○笠松支配四百二十五石・

遠山民部領百三石高合五百二十八石山田村○松平能登守領高三百三十一石駄知村○同領

高九百六十二石藤村○同領高千五十七石久須見村○同領高三百四十四石竹折村○同領高四百

九十二石野井村○同領高六百四十一石佐々良木村○同領高五十二石棕実村 宿人馬二十

五人・二十五匹の余は右助郷村へ触出す也

一、高札場宿外西の方町はづれにあり 札六枚あり

一、此村は慶長九辰年駅場になりし由伝へ 宿内長さ三町十四間ありて小宿也 東西へさし

たる町也 此村は町方分・神田分・足又分・八瀬沢分と分かる 町方は七十戸・神田十

四戸・足又四戸・八瀬沢二戸あり 神田は村北山の交い又は山腹に散在し 八瀬沢は街

道筋琵琶坂の西にありて茶亭二戸あり 足又は琵琶坂の左の方山の麓にあり 庄屋保々

長左衛門・市郎兵衛 是は問屋を兼ねる 今家九十戸・男女三百五人

一、宿東出はなれ左の方に川並方役宅あり ここにて白木の出荷物を改む ○東の境目を檜

木坂という 此先き立場釜戸内荻之島分炭焼茶屋とて二戸あり この先き大井宿までの

間を十三峠と教えていう

一、大湫より大井まで行程三里半 人足賃・駄賃は左の如し 上下本馬二百十六文・軽尻百

四十文・人足百八文」

(以上)